

漢法苞徳塾資料	No. 215
区分	論説
タイトル	難経に取り組むために 伝統医協・難経講義・第1回
著者	八木素萌
作成日	1991.04.28

◎医学書の中での『難経』の位置と意味

【1】様々な『難経』注釈書の序文に見られる見解の中から

★シンボリックなエピソードなど

『傷寒論』の注釈書の多さに並ぶ程に多い注釈書の数に『難経』の臨床書としての意義とともに、むつかしさを物語っている。

[a]: 『難経古義』には『文苑英華』卷第七百三十五雜序類第一の文を引いて叙文の一部にしているが、『難経』は「医経の秘録」で岐伯が黄帝に授け、これが伊尹から湯から文王・医和から秦越人まで伝わるのに三十八代を経過し、そこで秦越人が「初立章句」し、それが華佗に伝わるまで九代を経、それから更に黄公に伝えられるまで六代を要した事を記述している。つまり、黄公まで五十五代もかかっていると言うのである。

[b]: 長桑君に秘術と秘書を承けたという話は、「扁鵲」伝説はまた想像を越えた伝説的名医の話らしいものであろう。

[c]: 華佗の獄死と焚書の説も、長桑君の伝説に似て『難経』が「活人の書」とされている点を、如何にも寓話的に表現している。

[d]: 扁鵲伝説と秦越人、『難経』の著者は扁鵲であるとか、秦越人であるとかとか言われるが、『難経正義』(岩陳)の序文は、扁鵲は黄帝の頃の人であるが、黄帝が岐伯らの七名と医学について問答した時に、山深く隠れ住んで、黄帝と岐伯らの議論には加わらなかった。そして自から『八十一難』を書いた。後になってこれに註をしたのが秦越人である。扁鵲と秦越人は、もともとは別人で時代も遠く隔たっている人物である。混同するのは誤りも甚だしい。

この扁鵲の書は、秦の始皇帝の焚書の災いに会わなかったとしたら、『尚書』が壁に塗り込まれて隠されたので残った事になぞらえられよう。その『尚書』でさえ古今の相異があるのだから、後になって世に出た『難経』も、当初のものとは同じでは有りえない。と述べている。

[e]: 成書年代に関する諸説は、伝説の名医である神話時代の扁鵲の作が秘かに守り伝えられたものというのから、晋以後の成立であろうとするものまで、多くの説があるように謎に満ちている。岡西為人氏の考証以後新しい視点からの研究が起り、李今庸は

『読古医書随筆』の中に『難経』が「淋」字を用いないで「隆」字を使っているのは避諱（漢の煬帝劉隆の諱）であるから後漢の煬帝の延平の頃の前後であろう（106年の可能性大と）と言う。また、郭霽春『中国医史年表』では多紀元胤の『医籍考』の説に従って献帝劉協の初平元年（190年）の成立と述べて『傷寒論』の成立の前の20年と作表している。

[f]:『難経』は燼余の書である」に関する二つの説、華佗が獄死するに際して彼を良く処遇した獄吏に「これは活人の書であるから感謝のしるしに進呈する」と『難経』を渡したが、獄吏は妻に「貴方が華佗のような名医になったら、彼と同様に殺される事になりかねないから…」と燃やしたという伝説がある。今一つは始皇帝の焚書の災いに会ったという説。

★ひとり鍼灸家の為の医書のみならず

明清時代の若干の医書を例にみれば…例えば『医学心悟』に治療法則に関連して「六十九難」の子母の補瀉や「七十五難」の「瀉木補水」やについて触れており、金元四家は皆『難経』の論を検討し、『傷寒論』記述を更に展開させる為のバネにしている。つまり五臓の相互関係を研究し「補瀉」の論と「用薬」原理を考察する時に多にに関連させている。「注釈書」が多いだけでは無く多くの医家が『難経』の論点に触れている。

◎ 様々な『難経』研究上の問題

★『難経』と「経」

「経言」という書き出し等から、また楊玄操の説や徐大椿『難経経釈』などから、『難経』は『内経』のむつかしい問題を摘出して説き明かす為に著わされたと言う説が、常識化しているし、確かに『内経』との関係は多い。しかし、『難経』が「経」と言う「古医経」を、『内経』と限定してしまう理解は適切ではあるまい。

★『難経』の提起しているもの

『難経』の「発明」（明ニ発コス…つまり創意・創案であろう）と言われるものは、治療原理も含めて多面的であり鍼灸学の範囲に限定しきれない。このような点から後世の医家で鍼灸を施さない者でも『難経』に関して論じているのである。

★原テキストが無い『難経』

台平「故宮博物館」の「宋本」とされる『難経集註』が、最古の最良のテキストと言われるが、「宋本」というのは疑問で、もともと明の王九思が1505年に呂・楊・丁・虞・楊等の注釈本から編纂したものが『難経集註』だからである。「故宮博物館」の原本を直接に検討したいものである。『難経古義』や『古本難経闡註』のように、明確な意図をもって条文を組替えたものを別にしても、「通行本に基づ

いている」と言う諸註本に在る「本文」を比較検討しても、語句の異動が見られる。つまり、何が原テキストであるのか不明なままである。

★近代日本での『難経』の扱われ方の問題

江戸時代の研究を除けば、昭和の初期・中期の「経絡治療」以後に若干の注釈書があるのみであり、『難経の研究』（本間祥白）の影響が最も大きい。「経絡治療」以前の昭和期のものとしては森田幸門氏の研究があると聞かすが、まるで幻の噂話を聞くような感じでしかない。また藤木俊郎氏の『素問医学の世界』「1・2」や丸山昌朗氏の『鍼灸医学と古典の研究』の『難経』評価の影響も大変大きい。

- [a]: 「素難医学」などと自分の立脚するものを持ち上げているが、自分たちの「世界の色眼鏡」で見て解釈しているとしか思えない傾向。つまり、本気で真面目に「研究」したとは考えられない傾向。
- [b]: 『素問』『靈枢』や、または『傷寒論』の記述と『難経』が異なるからとして、完全に無視・黙殺しているもの。
- [c]: 一応は読んでおこうという傾向であるが、一冊ないしは二冊程度の、平易な解説書的なものをザット通観しているぐらいの傾向。
- [d]: 孫引きのもので部分的な知識で終わっている程度。

『難経』『難経』と言われている割には実際では本気で研究するものが極めて少ない、このようでは、『難経』は到底理解できないままであろう。それは、『難経』の記述のされ方が簡約で、語義が深奥である、という点から言えることかも知れないのである。

★若干の訓古の例から

「四難」の「各以其経所在～」の「経」の問題と、「五十八難」の「経」の問題。「十六難」の「其外証善潔 面青善怒」の「潔」の問題、「七十難」の「春夏者 陽氣在上人氣亦在上」の「氣」と「七十六難」の「氣」の相異の問題、「七十六難」の「當補之時 從衛取氣 當瀉之時 從榮置氣」の「取」と「置」の問題、「七十八難」の「動而伸之 是謂瀉」の「伸」の問題、「三焦」論の「謎」が『金匱要略』を読んで解けた例、等。

★『難経』研究の方法と態度について

- [a]: 古医書であるから、著作された時期の時代的・文化的背景を絶えず考慮して、古意味で理解するように努める。
- [b]: 著者の言葉をもって解釈するように努め、極力「色眼鏡で見る」ことにならないように力を込めて自制した姿勢を取る。つまり著者自身をして語らしめる方法である。
- [c]: 後代の研究や後代の医書など他の文献が『難経』から引用しているものや等の、こういった資料にも注意を払う事によって、校勘しながら解釈する。

- [d] : 表現が簡約で、論にはほとんど重複する所が無いので、絶えず全体との関連で考察を進める。課題別に『難経』の語句や条文を組み直して検討するのも良い。
- [e] : 他の重要な医書の中に記述されている類似文と比較対照して検討する。
- [f] : 他の医書の記述の内の論点が、『難経』のある論点と重なっているものや、近いものや共通するものについても、比較対照して検討する。

◎ 重要注釈書

少なくとも此の程度は研究して欲しい解説書

- ・『難経疏証』（丹波元胤）
江戸考証学派の傑作で語句注解に優れている。
- ・『難経古義』（膝萬卿＝加藤章）
臨床家の眼で訓詁校勘的にも高い水準を示した注解をしており、中国での評価も高いもの。章句を大幅に組替えている点も有名であるが、その解釈は臨床家の鋭い眼を感じさせる。
- ・『難経集註』（王九思）〔王翰林本〕
現存する最古の註解書であり、明以前の古註を編纂したものである。本文も信頼性が高いものであろうと見られており、現存の「通行本」の本文はこれに基づいている。
- ・『難経本義』（滑伯仁＝滑寿）
校勘の上で本文の確定を企画しており、その上で注解しているもの。高く評価されて来ている。
- ・『難経集解』（郭霽春）
最近年の校勘注解の書である。